



# ミッドナイト・ ギャラリー

[ブザーが鳴って3]

2月9日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 2月9日のおはなし「ミッドナイト・ギャラリー【ブザーが鳴って3】」

時代の空気に合っているかどうかで売れたり売れなかったりする。これは仕方がない。運と言ってもいいだろう。例えば一九六〇年代。反体制的な方が人気が出たことだろう。作り手にそんな意識がなくとも、反体制に見えた方が売れただろう。誰しも支持するのは自分が見たい絵、聴きたい音楽、読みたい本だ。テクニックの優劣や表現の完成度、表現の質なんか、多くの人には関係ない。

人気というのはそういうものだ。

一方で、そんな時代ごとの人気とは関係なく、揺るぎなく優れたものというのも確実にある。そういうのが作者の死後何年もしてから人気を集めて高い評価を受けたりする。生涯一枚も売れなかった絵描きが死後オークションで一枚何十億円で取引されたりね。そんな極端な例を出すまでもなく、ずいぶん後になってから「再評価」された作品はアートの世界にはいくらでもある。その場限りの人気ではなく、時間の雨や風を乗り越えて人々に必要とされる作品だ。できることなら、とおれは思う。そういうものと付き合っていきたい。

だからと言って、そんな作品を発掘して高く売りたいのかと言うとそれも違う。それはまたその場限りの、生き馬の目を抜くようなビジネスになってしまう。高く売りさばくための競争に（いや、狂騒に？）加担したいとは思わない。売れるように化粧してあげたり、バックストーリーを作ってあげたり、人目を引くようなことをしたり、そういう手伝いをすることも可能だ。「できる、できない」でいえばできてしまう。でもそれはおれがやりたいことじゃない。

ギャラリーをオープンしたのも、別に次のゴッホを見つけるためじゃない。もちろん、たまたまゴッホを見つけてぼろ儲けできれば素直に嬉しいだろう。それを否定する気はない。でもそのために嘘をついたりヘイコラしたり心にもないことを言ったりして無理するくらいなら、ゴッホを高く売りそこなって後で悔しい思いをする側にいた方がマシだ。おれはただ、自分が好きなものに囲まれていたいだけだ。そして同じように思う人に、おれが見つけた物を融通したい。

たまたま、好きが高じてだんだん集めたものが溢れはじめたので、こうやって売ったり買ったり商売もするけれど、本当を言うと、おれがやりたいのは売り上げ目当ての商売とは少し違う気がする。ひとつひとつのものが、それを本当に必要とする人の所に行けばいいと思うから、行き来させているだけなのだ。そういうのを何と呼べばいいのかわからない。わからないから古物商と名乗っている。そして、たまにはこんな風に商売にならないものを引き受けてしまうこともある。

いやいや。それは違うな。

こんな理屈では説明がつかない。

いま自分が置かれた立場を説明できない。

実はいま、おれは途方に暮れている。

目の前には若くして夭逝したアーティストの作品が並んでいる。と言いたいところだが、それは言い過ぎだ。おれの目の前にあるのは、不幸にして幼い命を奪われた小学生たちの図画工作の作品だ。手元に置いておけなくなって処分をすることになったと聞いて、衝動的に引き取ることにしてしまったのだ。でもご迷惑でしょうと言われて、とっさに「いえ。そういうものを扱うのが仕事ですから」と胸を張って答えたが、本当は別にどうするあてがあったわけじゃない。売り物にはならないし売る気もない。

子どもたちの担任だったという先生二人が帰った後、おれはその絵を並べて眺めながらため息をついた。どうするつもりだよ、おれ。捨てるわけにいかないし。だって捨てるというのを引き取ったんだし。絵やら工作やらがズラリ。タイトルを順番に読み上げた。1年3組うばじまかほ『おかあさん』、3年4組片野大吾『メガチョコロボット』、4年2組新城すみれ『となりの橋

本君』、6年4組久保田君江『めがね橋からの風景』、6年1組遠山昇『未来とうめい都市』。子どもは天才だよな。月並みなことを思った。

作品をそのままにして奥に引っ込み、CDの棚から『カインド・オブ・ブルー』を選んでセットし、差し入れのバーボンのボトルとグラスを一つ手にして作品たちの前に戻った。肘掛け付きのソファに浅く腰掛け、テーブルに置いたグラスに酒を注ぎ入れ、乾杯というか、献杯というか、とにかく彼らに挨拶をした。片野君のビー玉の迷路はなかなかの傑作だ。久保田さんはタイトルのつけ方が詩人だ。1年生のかほちゃんの作品はどれも絵の具の跡やはみ出したのりの跡がべたべたついている。彼女はきっとおしゃべりでせかせかした子だったんだろう。

ふと目を上げると、壁際に吊るした絵が一枚残っていた。おれは立ち上がり、その絵の前に立った。いろいろな形の手作りスタンプをペタペタ押し描かれた風景画だった。淡い黄色やピンクや紫の点々は花畑だろうか。濃い緑の木々や奥には古い日本の建築らしいものの青い影も見えている。この近くのそば屋がうまいんだよな。そう考えてからおれははっとした。知ってる。ここ、知ってるぞ。

折れ曲がっていたタイトルの紙を引き延ばしまっすぐにすると、そこには6年4組久保田君江『花の寺』とあった。そうだ。あのそば屋、岩魚の塩焼きかなんかが絶品だった。何の時にいったんだっけ、それ。どこだったっけ。しばらく絵を睨みつけてから、不意におれは納得した。よし。この風景がどこか突き止めるまで、この絵はこのままここに飾っておこう。

おれは誰もいないギャラリーの真ん中で、絵や工作に向かってグラスを持ち上げ、宣言した。「おまえたちをどうするかを考えるのはその後だ。それまではしばらくはここがおまえたちのうちだ」

(「花の寺」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## ● [「SFPインデックス」](#)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ミッドナイト・ギャラリー [ブザーが鳴って3]

<http://p.booklog.jp/book/43820>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43820>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43820>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.